Japanese Society of Cultural Anthropology

あり，II期にはハラッパの高杯や盃と交って，ラングプール土器，つゞいては黒縁赤色土器から北方黒色磨研土器（N. B. P. Ware）を輩出して，初期歴史時代のガンジス平原の文化とすら接触をもっている。

こうして一口にいってソーラシュトラには，少くともハラッパ文化が（多分一部のハラッパ人自身も）インダス河流域より流入したとみられるが，例えばラングプール，プラバス，アハールなどの地方文化と出合って磨擦のない混入をしながらも，多分彼らの文字を伝えることなしにやがてきえていったということになる。同様のことがラジャスタン地域にいえよう。この意味でこの二つの地域は，時代的ギャップをおいた上で何らの接触なしに，彩文灰色土器文化にとってかわられた東パンジャプ地方と，大分様相が違うことに注目せねばならない。

最後にハラッパ文化の終末年代の問題があるが，これも未刊の，最近米国から得られた C_{14} 測定の結果によれば，ロータルに於けるハラッパ文化直後の層は，1878±110 BC と 1818±140 BC，カリバンガンに於てはハラッパ自身の上限が 2111±53 BC と 2108±115 BC とでているから，これをそのまゝ信じれば，同地方に於けるハラッパ文化の終結は 2000〜1900 BC とみるべきであり，こゝでも又，ホィーラー等の，1500年 BC 終結説に疑問がでてくるわけである。

以上いくつかの新事実の紹介を試みたのであるが，紙数の関係から例証なしに試論のみを羅列するに終ったこと，前述の資料の多くが未刊であること，又筆者自身の浅学から諸賢の誤解を招くことを恐れるのであるが，又いづれの機会に，更に資料や実際の遺物にあたった上で，御教示を賜わりたく思う。しかし要は，インダス河流域に於けるハラッパ文化の崩潰の原因はわからないながら，まず安易にアーリア語族の問題をそこにもってくる前に，土器編年のみでなく，いわゆるハラッパ以後の"暗黒時代の文化"を考える必要がある。そしてそれにはまだまだ多くの発掘の結果を待たねばならぬという反省。そして同文化そのものが決して"突然に"終結を来したものではないという認識が必要なのである。又多分西（パキスタン〜イラン）側にカギがあると思われる，先ハラッパの問題も解かねばならないが，この研究もパキスタン政府，フランス隊，アメリカ隊などによる，シンドの先ハラッパ文化究明がすゝんでいるし，いつか同文明が"突然に"はじまったのではないことも明らかにされるであろうことをつけ加えておこう。

（東京大学）（1964年6月）

参考文献抄録

Anthrop. Surv. Ind., *Human Skeletal Remains from Harappa*, Memoir 9, 1962, Calcutta.

Archae. Surv. Ind., *Archaeological Remains, Monuments and Museums*, Vol. 1, 1964, New Delhi.

——, *Indian Archaeology*, Annual Review, 1953–1961, New Delhi.（特に Gujarat, Panjab, Rajastan の項）

LAL, B. B., 'Excavations at Hastinapura', *Ancient India*, Nos. 10–11, 1954–5, New Delhi.

——, 'Protohistoric Investigation', *A. I.*, No. 9, 1953, New Delhi.

RAO, S. R., 'The Excavations at Lothal', *Lalit Kala*, Nos. 3–4, April 1954–March 1957, New Delhi.

——, 'Ceramics of the Indus Valley in Gujarat', et. al., *Marg*, Vol. XIV, No. 3, 1961, Bombay.

SANKALIA, H. D., *Prehistory and Protohistory in India and Pakistan*, 1963, Bombay.

SUBBARAO, B., *The Personality of India*, 1958, Baroda.

VATS, M. S., *Excavations at Harappā*, 1940, Calcutta.

WHEELER, R. E. M., 'Harappa 1946', *A. I.*, No. 3, 1947, New Delhi.

——, *Early India and Pakistan*, 1959, London.

第7回 Permanent International Altaistic Conference 印象記

田 中 克 彦

第七回 PIAC（1964年）はオランダ Arnhem 近郊の，ライン河がはるかにかげろうをとおして見える美しい Oosterbeek で開かれた。われわれボン勢の一行は，Heissig 教授と岡田氏の運転する車に分乗して8月29日朝ボンを出発，ラインに沿って北上するうち，ひるすぎには会場に到着した。

夕刻—と云っても夏の強い陽ざしがまだ残ってまったく明るいのだが—Secretary-General である Indiana 大学の SINOR 教授と，世話役の Karl JAHN 教授の挨拶につづく夕食で先ず日程がはじまった。朝は9時までに朝食をすませてから正午まで，午後は2〜6時まで会議

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Cultural Anthropology

が行なわれ，同一の建物の中で三度の食事と起居をも共にするという規則的な合宿生活であった。簡素な宿泊所といった会場には集会所が附属していて，ここでいっさいの行事が運ばれた。会議は9月3日の昼食をもって終った。その間，30日の午後には一同バスに乗って Van Gogh の作品を豊富に集めている Kröller-Müller Museum を見学，さらに汽船に乗りついでオランダの最近の埋立工事の成果である Yssel Lake を見物した。バスの中でも，たえず学問的な意見の交換がなされており，外国に出るのははじめてで，ことばもひどく不自由な私を退屈させず話相手になってくださったのは GABAIN 先生であった。講壇以外での，たとえば食事中などに個人的に行われた質問や情報の交換の中にはしばしば貴重なものがあった。たとえば RÓNA-TÁS 氏がたまたまモンゴルの農具の話しをしておられたので，モンゴルの農耕は独立に発生したものか或は農耕地帯からの影響によるものかとわきから口を出したところ，御自身としては前者の可能性を考える方に傾いているとのお答えであった。

参加者は私の知るかぎりでは31名であったがその他に非公式の参加もいくらかあった。組織は甚だ形式ばらぬ家族的なかたちで行なわれたので，参加者名簿も報告の目録も印刷して手渡されるということはなく，不明な点は周囲の人，場合によっては当人にたしかめながら次の一覧を作った。隣席の BAWDEN 氏は私のノートをのぞきこんで親切に誤まりを指摘された。

ドイツ	CABAIN, Annemarie von
	HEISSIG, Walther
	JOHANNSEN, Ulla
	LAUDE-CIRTAUTES, Ilse
	SAGASTER, Klaus
イギリス	BAWDEN, Charles
	BOYLE, John Andrew
	CLAUSON, Sir Gerard
	MEREDITH-OWENS, C. H.
アメリカ	ECKMANN, Yanos
	KRADER, Lawrence
	SINOR, Denis
	TIETZE, Andreas
トルコ	ARAT, Rahmeti
	ESIN, Mme E.
	EREN, Ismail
ハンガリー	HASAI, Georg
	KAKUK, Susanne
	RÓNA-TÁS, András
日本	OKADA, Hidehiro
	HANEDA, Akira
	TANAKA, Katsuhiko
ポーランド	TRYJARSKI
	ZAJACZKOWSKI, Ananiasz
チェコスロバキヤ	POUCHA, Pavel
フィンランド	AALTO, Pennti
オランダ	JAHN, Karl
イタリヤ	BOMBACI, Alessio
インド	LOKESH, Chandra
モンゴル出身者	
	HALTOD, Magadbürin
	JAGCHID, Sechin

この名簿から知られるように，今回のアルタイ学会は何といってもヨーロッパ支部会のようなもので，たとえば「民族学研究」第26巻，第4号で服部四郎氏が報告されている第5回 PIAC のときのような多数のアメリカからの出席はなかった。東欧の共産圏諸国からは期待されていた研究者の出席は実現されたのに，今回もソ連邦以東の共産圏からの参加はなかった。モスクワの第七回国際人類学・民族学会議のときに接したソ連邦のアルタイ学者のばあいから判断して，この PIAC の関心とソ連邦のそれとには大きなへだたりは感じられない。ソ連邦の研究者の不参加は，おそらくイデオロギーにかかわる理由からではないであろう。

参加者一人一人がアルファベット順に演壇に登り，この会の慣例となっている Confession が2日にわたって行なわれた。GABAIN 先生が七月中旬野尻湖畔で行なわれた日本のアルタイ研究者の会のことをすでに知っておられ，そのことについて話せば有益であろうとの示唆を個人的に与えられたので，私は知っているはんいで特に印象深かった，佐藤長氏の Hu lan deb ther の研究とその訳業について特にふれたところ，この本を入手するにはどうすればよいかとの問い合わせが出たりした。また，山田信夫，護雅夫両氏がこの集会のためにつくされた大きな努力についても語ったところ，GABAIN 先生は興奮をつつみかくせぬといったおももちで立たれ，日本の学会の寄与の大いなることを強調して，私のつたない報告に花をそえられた。

しかし私がこの会に特別の好奇をもってのぞんだのは，日本の研究者の孤独で誇り高い健斗でまもられているアルタイ学というものが国際的にどのようなかたちで存在しているかということを多少傍観的に眺めてみたい

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Cultural Anthropology

という気持ちからであった。アルタイ学という研究領域の中で考えられる主要な関心は研究者のたちばによって異る。言語学者からすれば，アルタイ学の存立の基盤はアルタイ語比較言語学という仮説にあるのであって，中心は言語学にあると解される。しかし日本においては，言語学は方法としての学の自律性を尊重するあまりに，対象そのものを広い背景にすえて解明する点においてあまり成果をあげていないのではないか，それは具体的には歴史学や民族学の成果が言語学的研究と相互に補強しあうような形になっておらず，両者の間には埋めらるべき深いみぞがあるのではないかということをも感想的に述べておいた。

日本でアルタイ学に関心がもたれる一つの動機は，それが日本語と日本民族の由来にかかわってくるからであって，タタールの侵寇という歴史的な回想，或は伝道的な関心から発するヨーロッパの東洋学とは異る風土がある。そこで必ずしもアルタイ学の視野にはおさまらないかもしれないが，日本列島居住のもんだいをめぐってはアイヌ語に多大の関心が払われており，言語年代学的方法の一つの適用である服部四郎のアイヌ語方言辞典の出版が近づいているということも報告しておいた。報告の題目からも知られるように，その大部分は言語学以外のもので，PIAC のそのような性質については服部氏がすでに前述の報告で指摘しておられる。

しかしともかく日本の学会に寄せられている期待は相当に大きいものであり，それにもかかわらず私の語学力と準備の不足から残念ながら極めて不充分なことしか話せなかった。たゞ私は「民族学研究」に掲載された服部氏の報告を紹介しただけでも，SINOR 氏からただちに，その飜訳をしてはどうかという提案があったほどである。わが「民族学研究」の名は参加者—特にドイツからの—によく知られていて，JOHANNSEN 嬢はすべての論文に英文のレジュメをつけてほしいと強く要望された。

上の表から見られるように報告はすべてドイツ語か英語でなされ，Confession では若干のフランス語が聞かれた。ロシヤ語は参加者のかなり多くが理解するようであったが，まだ共通用語とするには至らないと思われた。共産圏からの参加者とは私はしばしばロシヤ語で話しをしたが，そのうちのある人は，英語を用いる方が国際会議には適しているから英語で話すようにとすすめた程である。私の聞きちがいでなければタンヌ・トワに10ケ月滞在したというハンブルクの JOHANNSEN 嬢のロシヤ語は相当に巧みであった。ロシヤ語についでトルコ語も，トルコ学者間ではしばしば聞かれた。HALTOD（ボン大学），JAGCHID（ロンドンから台湾へ行かれる途中立ちよられた）の2人のモンゴル人にはモンゴル語で Confession をするようにとの Heissig 先生のすすめで，講壇の上から2度モンゴル語が聞かれた。BAWDEN-JAGCHID の報告のみ，その内容が前もって刷り物として配られた。何よりも説得的であったのは多数のカラースライドであり，また TRYJARSKI 氏の，テュルク族のモンゴル人民共和国内に残した種々の遺跡がカラーで映写された時には，共産圏の学者の有利な立場が羨まれずにはいなかった。

今回の PIAC のテーマがたまたま「馬」であったというだけの理由からではなく，この参加者が世界のアルタイ学界を代表すると認めるならば，大きな関心の中心は何といっても文化史の面にあることが明らかになるであろう。その場合，理論的にきびしい反省がなされ，方法論的な手順を顧慮しながらの研究というよりは，むしろ資料の披露や自由闊達な興味の吐露の場であったとの印象をうけた。参加者が互いに揚足をとるというような場面は一度として見られず，新しい話題にしずかに耳をかたむけるといった雰囲気であった。

ユトレヒトの Karl JAHN 教授から lectures の一覧をお送りいただき，ここに掲載することができた。記して感謝する。会議の後，多忙と環境の変化のため，この報告がおくれまた印象もいくらか古ぼけていることはお許しねがいたい。尚，岡田英弘氏が東洋学報に同じく第七回 PIAC の報告を送られた由で，それが本稿に欠けた部分を少なからず補うものと信じここに附記する。

（東京外語大学　現在西独ボン大学留学中）

報告リスト

Prof. AALTO: Preturkic Inscription (with slides)

Prof. ARAT: Das Pferd in der kazantürkischen Volksliteratur

Dr. BAWDEN, Mr. JAGCHID: Some Notes on the Horse-policy of the Yuan Dynasty

Dr. BOYLE: A Form of Horse Sacrifice practised by the 13th and 14th century Mongols

Dr. Ilse LAUDE-CIRTAUTES: Farben und Pferde

Sir G. CLAUSON: Turkish and Mongolian Horses and the Use of Horses—, an Etymological Study

Madame E. ESIN: The Horse as Art Motif and

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Cultural Anthropology

Symbol in Turkestan (with slides) Dias

Prof. von GABAIN: Pferd und Mensch im mittelalterlichen Centralasien Dias

Prof. W. HEISSIG: Mongolische Quellen Über das Pferd

Dr. U. JOHANNSEN: Der Sattel bei den altaischen Völkern Dias

Dr. Lokesh CHANDRA: Two Classical Hippological Treatises

Dr. P. POUCHA: Einiges über das Pferd in der alten u. neuen Mongolei

Dr. RÓNA-TÁS: Bemerkungen zu der Diskussion und den Angaben über das Material, das ich über das Pferd in der Mongolei gesammelt habe.

Dr. SAGASTER: Gesetzliche Bestimmungen über das mongolische Pferderennen

Prof. D. SINOR: Einige Bemerkungen zu den altaischen Pferdenamen

Dr. E. TRYJARSKI: The Present State of Preservation of the Old Turkic Relics in Mongolia

Film: Les monuments turcs de Mongolie

Prof. A. ZAJACZKOWSKI: Das Pferd nach dem arabisch-kiptschakischen Glossar

Dr. E. TRYJARSKI: Das Pferd in den armenischen-kiptschakischen Texten

第36回国際アメリカニスト会議

増田義郎

第36年国際アメリカニスト会議は，1964年8月31日から9月9日にかけて，エスパニァのバルセローナ，マドリー，セビリャの三箇所で行われた。バルセローナの開会式には文部大臣のラーラ・タマーヨが出席して開会の辞を述べ，また三都市間の連絡には，学会専用の急行列車を仕立てるなど，エスパニァ政府も会議にひじょうな力を入れた模様だった。

今回の会議出席者は，約700名と言われ，アメリカ合衆国，スペインの代表が過半をしめたが，ほとんどすべてのラテンアメリカの国々から学者が参加した。日本からは，石田英一郎，泉靖一，寺田和夫，増田義郎の四名が参加したが，同会議への積極的組織的参加としては，はじめてのことだったと言える。すなわち，過去のアメリカニスト会議にも，日本からの個人的な参加発表，および消極的参加はあったが，今回のようにまとまったかたちで参加し，発表，討論，シンポジウムを分担し，また部会の coordinator を引きうけたことは，なかった。それだけに，最近の日本のアメリカニストの活動がこの学会に反映されたと言うべきで，今後とも引きつづき同会議への参加がつよく要望されたと同時に，われわれの側としては，同会議に対応するような国内組織の可能性も，考えていいのではないかという印象を持った。

元来，国際アメリカニスト会議は，過去から現在にいたる，アメリカ大陸の原住民文化の諸問題を扱うことを目的とし，方法的には民族学だけに止らず，地理学，歴史学，考古学，自然人類学，言語学等の各部門に関連した，幅のひろい学界である。今回の会議にもこの特質は十分発揮され，いま思いついたままに各部会の共通テーマをあげてみても，「原住民のドキュメント」「インディヘニスモ」「経済史」「社会変化」「地理学的発見」「インディヘニスモと社会人類学」「ブラシルとベネスエラの考古学」「イベロアメリカの文化変容」「エスノヒストリー」「アメリカ原住民高文化の基礎——農耕と村落セトルメント」等，多彩な問題が扱われて，各専門間の交流と意見交換が効果的に行われた。

今回の会議で特に目立った問題をあげてみると，ドキュメント利用の問題，土器と農耕の発生に関する今までの考古学的諸研究のインテグレイション，特にメキシコにおける社会人類学の新しい展開，旧大陸からの文化伝播論の新資料等があろう。

第一のドキュメント利用の問題について言えば，元来アメリカニストは，いわゆるクロニスタ文書を利用して，先史文化の再構成に力めてきた。Trimborn, Means, Rowe などの業績はその好例と言えよう。しかし，多くの問題点が過去において存在した。たとえば，いわゆる cronistas clásicos ないし cronistas oficiales のみが偏重されてきたこと，本格的な文献批判なしに記述が無差別に利用されてきたことは，大きな欠陥だった。しかし，最近 Porras Barrenechea や Esteve Barba のまとまった cronista 解題が出たことから分るように，歴史学者や民族学者が利用しうる史料ないし文献の整理期に今やさしかかっているのは事実である。今回の発表でも，Lounsbury, Murra 等の発表によって，従来ともすると無視されてきた，地域地域のドキュメントの価値が指摘され，また，それらのドキュメントが，Inca Garcilaso などの多少幻想的誇張的な記録とちがって，征服後の植民地経営上の必要から発した社会調査に関するものが多いため，先史時代の文化の持続や遺存

NII-Electronic Library Service